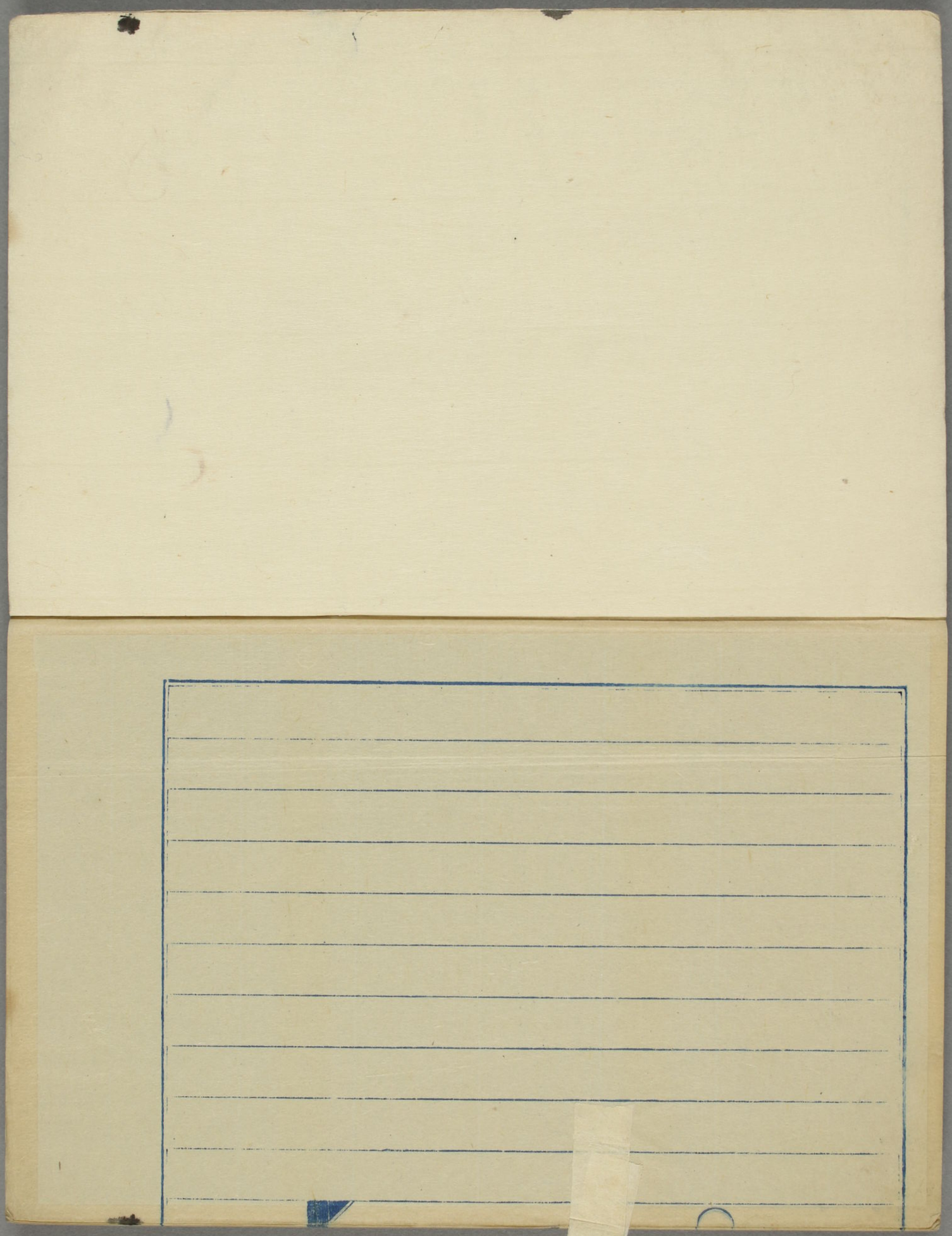
甲辰乙巳備忘錄

養浩堂藏書

早稲田大学図書館
文書27
A 115



一月二十三日 樺山伯大磯に別荘を訪て談話

樺山曰く

舊臘十二月廿四日頃寒海嘯の報に感服

申す心神に背反し実に感服

なり 去月十五日迄の分横浜毎

新聞紙に掲載せり

解釈の事情を真相を現出せしめし

満洲の問題を要約し支那

直隷を極めて日本を窺うべき浪を浪を

海外に出世話に真平出制の為の中 横浜

十二月八日

朝鮮問題ハ露公使ローゼンヲ小村外務大臣ノ招
待シ境界ヲ定メ露韓地ヲ開港セザ
ルベカラザルヲ強ク主張シ
我ガ政府ハ内議セ
ザル人民ノ我政府ヲ内議セ
ザルヲ容ス我政府ハ内議セ
決シ之ヲ拒絶シ露国ノ義着々ハ
須臾ニ報告セシ露ハ十二月十
章ヲ以テ経界トスベキヲ回答ス
絶ヲ以テ経界トスベキヲ回答ス
ニ韓領地ヲ書定セリ

以下
5丁
白紙

增税之議

[illegible]

戰時之急需を慮り為め設府移出戰時增
税之計畫を立てつゝあるが一面の考慮國費
本位の連合國議を催し決定を為すべし　大觧

增税額概定

一金七千萬圓　地租　所得税　營業税　酒税　砂糖
之を　[illegible]　葉烟草の專賣を引上げ又新税と
為す增税の中成り行き俗稱付
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

せうとう
右少輔

臨時部ふかき内地鐵道其他弘んど其全部

一金五千萬圓　繰延

繰延若しくは一方に於ては七千萬圓の歳入を場
合とせざるべし他方に於ては五千萬圓の歳出を減額す
べきも税率を増加せられざる
制限を加へざるべからざるいへど人民の負
担加減の厳重なる制限を加へざるべからざるいへど人民の負
担すべき税額節減の目的なるべきも又戰時
の年限に附せざるべからざる結局
戰爭の端を開きたるものなり前金

定額に達するまで今日の場合に於ては期を定めず
期限を付せざるべからず却て可ならずその御座有
し今日の成業に期限付きに非ずして尤も法文に
云ふ所に於て議院に於て僅かに出せる第一号の場合
意なりと信ずと雖も法律に定めざるべからざるなり

以上

戰費豫算業

臨時議會冒頭第一の提出に戰費

一金三億圓　第一回に軍費減額

内

一金壹億圓　臨急動念ヲ基ク　國庫債券ヲ收入

一金五千萬　事業係延及改革節減

一金五千萬乃至七千萬　地租增徴其他

（酒税ヲ南リ雜業）

一金壹億圓ヲ以テ八千萬　一時債入金ヨリ

公債発行ニ依頼スベキ計畫ヲ

基ク如クニ財源ヲ地租增税業ニ移サ新行事業ヲ

他方ニ於テ地租改税ヲ一部府県税ヲ地租ニ

於テ五十錢市町村税ヲ同三十銭ニ限定シ其他諸税ニ

超過セシムルコトヲ決定シ実際地租增徴ニ関シ国民ノ負

擔ヲ甚ダ微少ナラシムベシ

甲辰日記

一月四日晴

正午十二時發新橋赴大磯車中高島子
と邂逅す

伊藤氏に訪ひ新年と云て鴨一隻を贈

十五日晴

午前右衛門三田行小畠氏を訪ひ新年
を祝し鳳凰の扇を贈る

酒を呑む

夕刻常山氏と共に滋子母常山氏と
大磯に向ふ 旅館碧水荘 宿泊

六時
午前伊藤を呼び和歌浦を
作と励ます
午後高島別荘を訪茶話
七時
長崎林蔵師を訪三好医学
校仏測入洲
高島を訪ね伊藤を訪ね太平楼濱来玉陸軍
卿と協議をなす
祝三暖燈を和歌の上村に出府せと

六時
八時
石井を訪ひ祝三を見吸物出でしを
三好氏に会し洋医分科を設ける説
陸奥宗光と会し伊藤を訪ひ茶話
梅子義熱海に移転を勧
九時
祝三と南風熱し三好に洋医の石井
来り入浴一杯かの府東京より来る 十時過
風呂出る

十六時　午前六時ニ訪問京ヲ
山下梅花数株開放
祝三日早天四京ニ
寺好結如春　祝三日
仙閣春色梅未開　山中一日前新醸
朝霞　夕雨　晨霞数杯岸濤
搭雪来
午後帰京
今日ハ伊藤山縣大臣ハ東京ニ帰ル
花八伯爵ハ伊集院海軍大臣ハ帰ラス

十二月　午後幸倶楽部新年宴席ニ開ク
例ノ顔觸集席ス
今日ハ支那問題ハ前席ニ元老閣臣顔
揃ハ新ニ出席セベシ

明治三十六年十月三十日　電信
栗野公使ヘ　小村外務大臣
本大臣ハ本日ハ訪問ニ対シ帝国政府
ハ確定條件ニ基ク為ニ栗野公使ヘ提

左ノ如ク

第一條 清韓兩帝國ノ獨立及領土保全ヲ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條 兩締約國ハ韓國ニ於テル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ韓帝國ノ行政ヲ改良スヘキ助言及援助（但シ軍事上ノ援助ヲ含ム）ヲ同國ニ與フルハ日本ノ權利ナルコトヲ承認スルコト

第三條 韓國ニ於テル日本ノ商業的及工業的活動ノ發達ヲ阻礙セサルヘキコト及此等利益ヲ保護スルカ為ニ採ルヘキ總テノ措置ニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條 前條ニ掲ケタル目的又ハ國際的爭亂ヲ起スヘキ騷擾アル韓國ニ軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利ナルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第五條 朝鮮海峽ノ自由航行ヲ妨害シ得ヘキ兵要ノ事ヲ韓國沿岸ニ設クヘカラサルヘキコトヲ日本ト露國トノ間ニ於テ約スルコト

第六條 韓國ト滿洲トノ境界ニ於テ西側各

キロメートル、互リ一ノ中立地帯ヲ設定シ右地帯内ニハ締約国亦タ相互ノ承諾ナクシテ軍隊ヲ入レサルヘキヲ相互ニ約スル事

第七條 滿洲ハ日本ノ特殊利益ノ範圍外ニ在ルコトヲ日本ニ於テ承認シ韓國露國ハ特殊利益ノ範圍外ニ在ルコトヲ露國ニ於テ承認スルコト

第八條 日本ハ滿洲ニ於テ露國ノ特殊利益ヲ承認シ幷ニ此等利益ノ保護スルカ爲メ必要ナル措置ヲ採ルハ露國ノ權利スルコトヲ承認スルコト

第九條 韓國ノ條約國ノ臣民ハ露國ニ於テ商業上及居住上ノ權利及免除ヲ妨碍セサルヘキコトヲ日本ニ於テ約スルコト幷ニ清國ト條約ヲ結ヒ日本ニ屬スル商業上及居住上ノ權利及免除ヲ妨碍セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第十條 今後韓國鐵道及東清鉄道ニシテ鴨綠江ニテ延長セラルヽニ至ラハ該兩鐵道ノ連結ヲ阻礙セサルヘキコトヲ相互ニ約スルコト

第十一條 本協約ハ從前韓國ニ關シテ日露兩國ノ間ニ結ハレタル總テノ協定ニ替ハルヘキコト

明治三十六年十二月十二日　電信

栗野全權公使　小村外務大臣

露國公使ハ昨十日本大臣ニ来訪シ本國政府ノ訓令ニ依リ我確定修正案（十月三十日當方発電所報）ニ對スル復答案ヲ記載シ露國政府ノ新要求ノ公然撤出シタリ

第一條　韓帝國ノ獨立并ニ領土保全ノ尊重スルコトヲ相互ニ約スルコト

第二條　露國ハ韓國ニ於ケル日本ノ優越ナル利益ヲ承認シ并ニ民政ヲ改革スヘキ助言ヲ以テ

韓國ヲ援助スルハ日本權利ナルコトヲ承認スル

第三條　韓國ニ於ケル日本ノ工業的及商業的活動発達ニ反對セサルヘキコト并ニ此等ノ利益ヲ保護スルカ為措置ヲ執ルコトニ反對セサルヘキコトヲ露國ニ於テ約スルコト

第四條　前條ニ掲ケタル目的又ハ國際紛爭ヲ起シ得ヘキ騒乱若クハ騒擾ヲ鎮定スル目的ヲ以テ韓國軍隊ヲ送遣スルハ日本ノ權利ナルコト

露國ニ於テ承認スルコト

第五條　韓國領土ニシテ北緯三十九度以北

ヽ在ル部分ハ中立地帯ト見做シ両締約國
孰レモ之ニ軍隊ヲ引キ入レサルヘキヿヲ相互ニ約
スル事

第六條 韓國領土ニシテ北緯三十九度以北ニ在ル
部分ハ中立地帯ト見做シ両締約國孰レモ
之ニ軍隊ヲ引キ入レサルヘキヿヲ相互ニ約スルヿト

以下
3丁
白紙

板垣八年大阪會議ニ出席

伊地知曰八年三月板垣氏出身
往返おしまつかつタ

国会編纂資料
明治十年西南騒擾板垣在東京ニ二月十二
日帰土佐
十年五月十四日大久保暗殺
八月十六日獄起陸奥宗光於元老院初稿
傳林有造大江卓下獄
十二年片岡謙吉出獄
十三年三月片岡出京國會開設建白
書持参
八月六日誠郎岩倉右府ヘ面會有所說

国憲起原明治九年丙子若倉感動花
子私編纂ニ
九月廿日板垣氏ノ訪花壽治薬来東
京素隠居張明後藤別荘ニテ不遊板
垣氏ハ此時余宿所新橋線停車場定招
板垣勧一杯所酌与板垣
談舊示演所編纂ニ国憲始末板垣
子稿著

以下
7丁
白紙

関ヶ原ニ役島津義弘六十五歳ニ出陣ス
軍ヲ敗走伊賀越ヲ経テ薩ニ帰ル
義弘ハ後年剃髪シテ
龍伯ト称シ隠居ス
一説ニ曰ク大坂
ヨリ帰ルシ時薩人ノ来住ヲ
ノ一族ニ賜ヒ
ヨリ伯ハ信州飯田藩ヲ
求メテ西洋ヨリ帰ル士族ノ教戒ニ
従ヒ出家ス

三十六年　十八議會

歳入　弐億五千参百参拾萬参千五百弐拾

歳出　弐億四千九百四拾萬八千九百七十円

三十七年

三十八年

歳入　参億四百参拾三拾萬参千九百九拾八円

歳出　弐億千九百五十二萬四千四百参拾六円

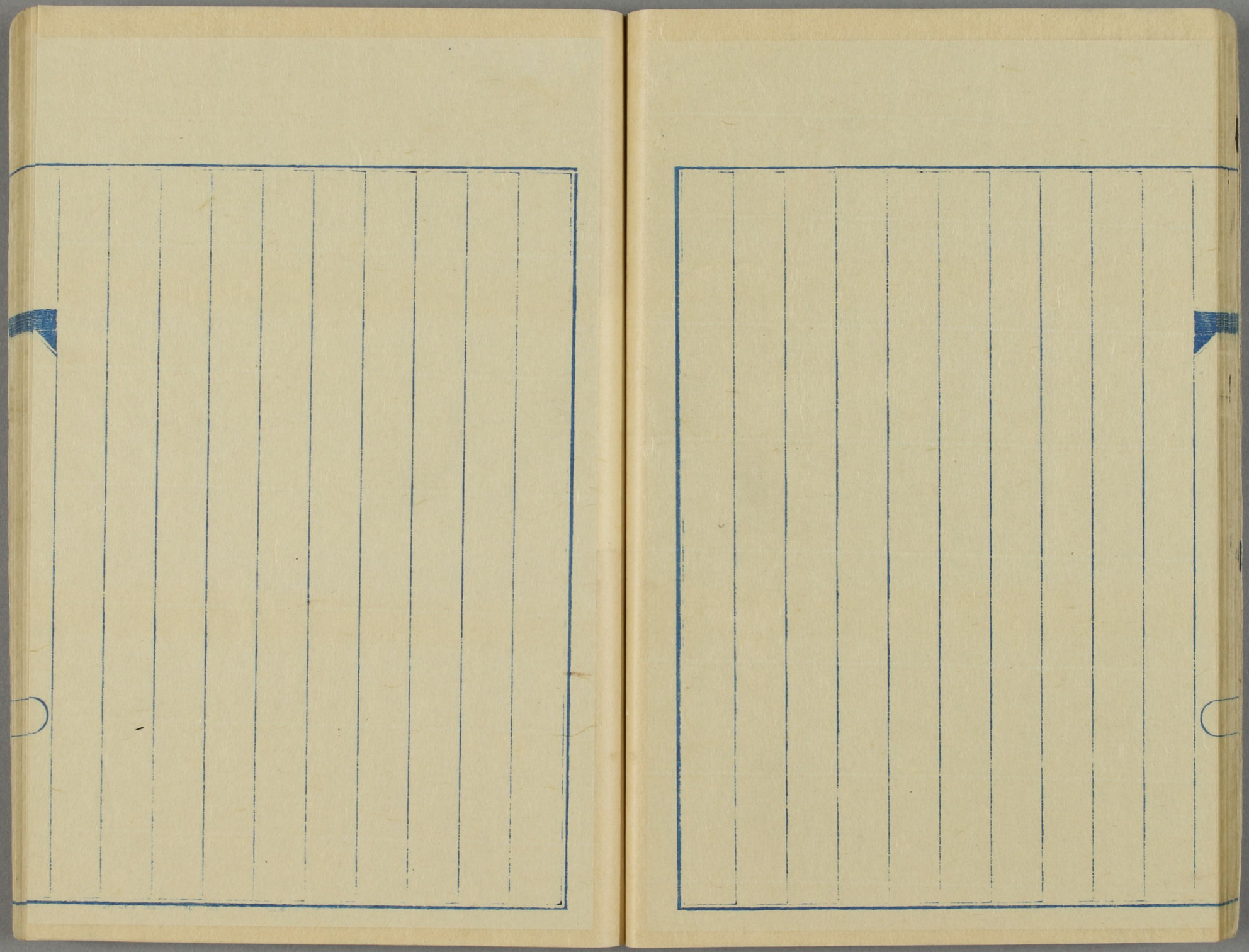
三十九年

明治十年計別格官幣社

常盤神社　水戸　祝國

豊榮神社　文科　光敦

照名神社　島津齊彬



以下
6丁
白紙

備忘録

二十八年黒田伯意見二月廿六日

天下之大勢を察し能く其中堅之運命を考へ之に当事共不穏之思ひ

清国と不相尊重自重之知彼口先之事

列国我国に干渉有之候へ共能く知

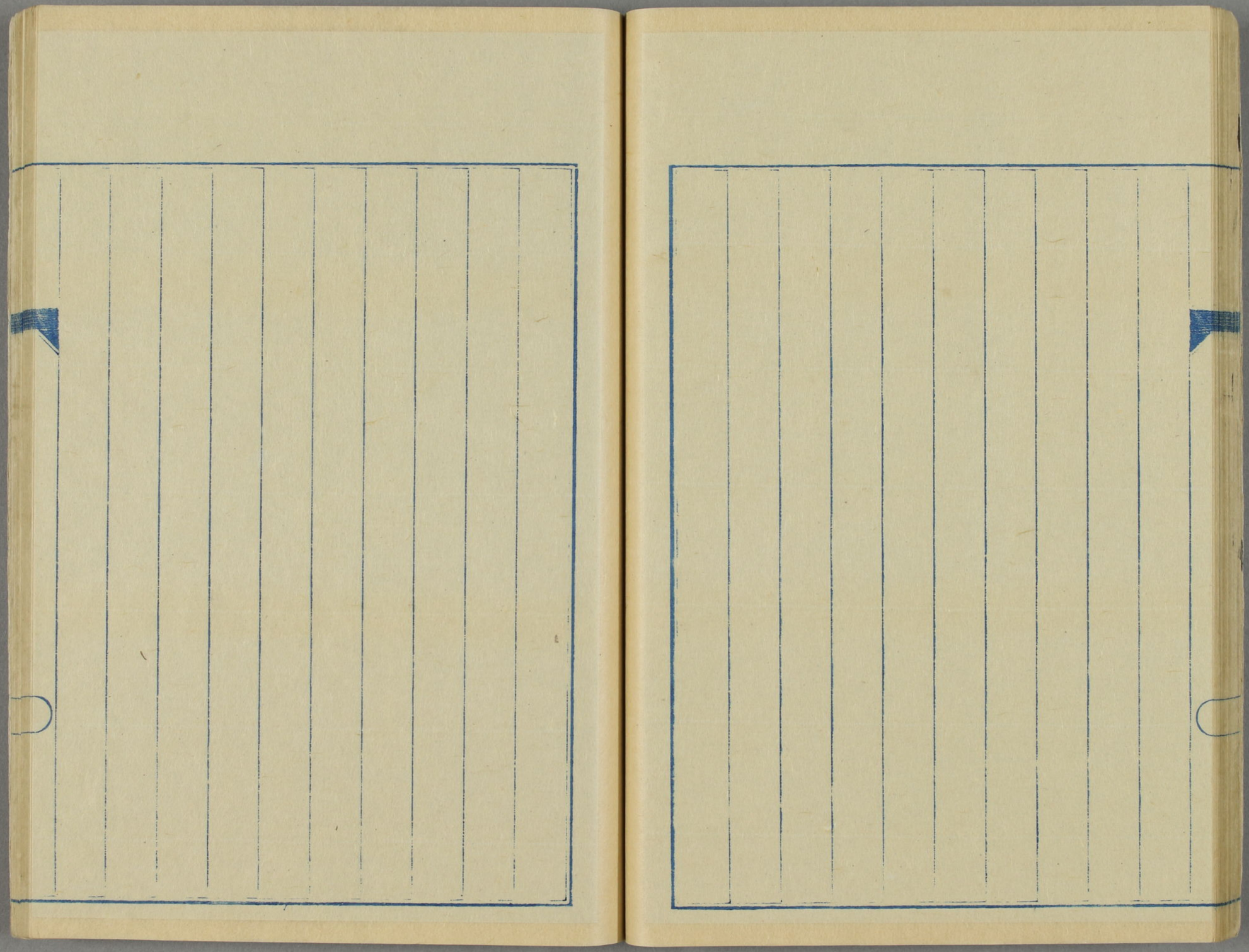
人情を察し

戦争之後に新西兵数年ならずして北地

に進出成らん英国等前備為

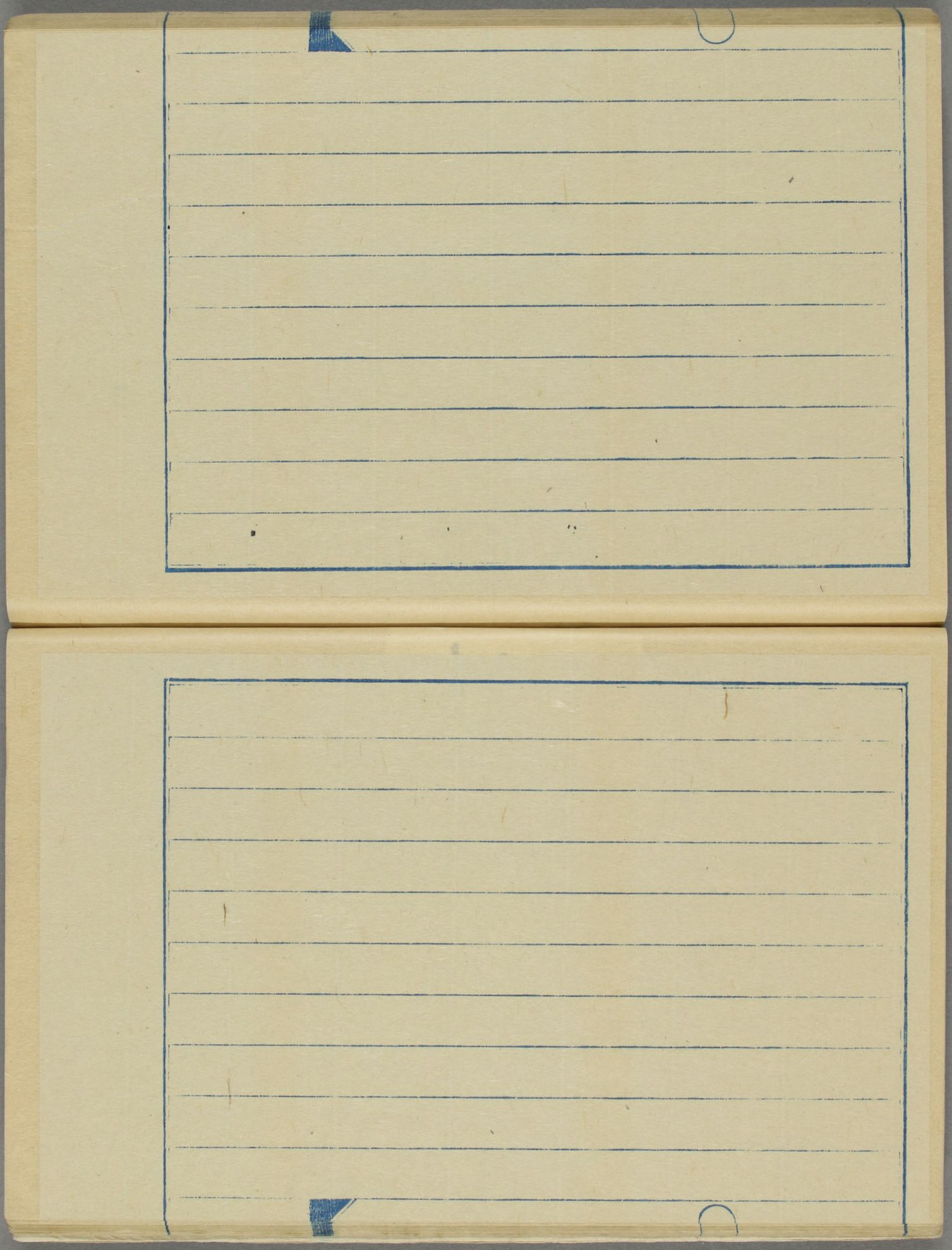
也伊太利も迫て軍艦を

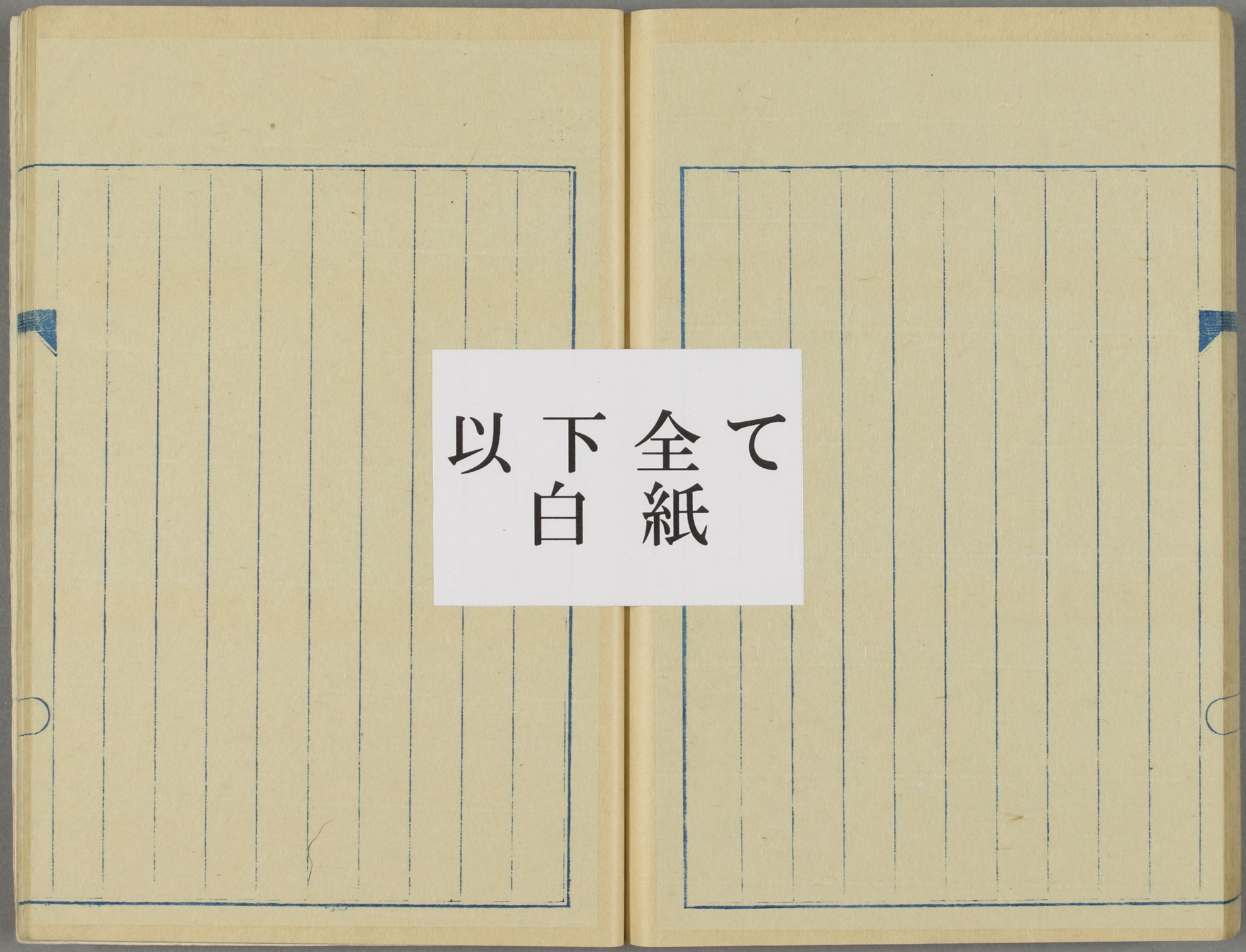
其日京に帰り立ち居ると舊契と不相
違將来と責任実と大同小異なり



以下
24丁
白紙

日露媾和談判





以下白紙全て